

# 1. 評価結果概要表

作成日 2008年4月16日

## 【評価実施概要】

事業所番号	0370300089		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム「ひまわり」		
所在地	〒022-0002 岩手県大船渡市大船渡町字山馬越196番地 (電話)0192-25-1582		
評価機関名	特定非営利活動法人いわての保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号		
訪問調査日	平成20年2月28日	評価確定日	平成20年4月16日

## 【情報提供票より】(平成20年2月12日事業所記入)

### (1) 組織概要

開設年月日	平成 8 年 12 月 11 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	11 人	常勤 9人, 非常勤 2人, 常勤換算	9.7人

### (2) 建物概要

建物構造	軽量鉄骨 造り	
	1階建ての	1階部分

### (3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	18,000 円	その他の経費(月額)	管理費18,000円その他実費負担
敷金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食	220 円	昼食 280 円
	夕食	500 円	おやつ 0 円
	または1日当たり		1000 円

### (4) 利用者の概要(2月12日現在)

利用者人数	9 名	男性	1 名	女性	8 名
要介護1	0 名	要介護2	2 名		
要介護3	2 名	要介護4	3 名		
要介護5	2 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 86.1 歳	最低	76 歳	最高	95 歳

### (5) 協力医療機関

協力医療機関名	地ノ森クリニック、菊池歯科クリニック
---------	--------------------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

JR盛駅より車で5分程度の場所にあり、大船渡市のほぼ中心部に位置している。同一敷地内には老人保健施設や特別養護老人ホームもある。開設から10年以上たつ歴史のある事業所で、開設当初からの利用者が元気に過ごしている。長く利用者の暮らしを支え続けてきた実績は素晴らしく、地域からの信頼も厚い。また母体となる法人は、同市内に複数の介護サービス事業を実施しており、それ以外にも「呆け一座」公演や海外法人との提携など、活動は多彩である。地域とよく連携がとれており、運営推進会議には地域住民および各種機関が参加している。長く入居している利用者が多い故に重度化も進行しているなど、草分けならではの難しさもあるが、職員は利用者の「笑顔」を喜びとしながら、利用者本位に支援していくために必要なことを話し合い、学び続けようとする意欲が感じられる。

## 【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回評価では介護計画の見直しや、地域交流の部分等で話し合いがされている。介護計画の見直しは定期にできないケースもあるが、概ね3か月を目途として見直されている。また地域交流に関しては、各種行事での交流のほか、中学校の総合学習においても交流する機会があり、今後も継続していく予定である。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>全職員で項目を分担して自己評価を行い、管理者が全般的な集約を行った。なかには捉えにくい項目もあったとのことだが、それらの理解も含めて自己評価では職員間の話し合いを重視しており、そのやり取りの中で個々の職員がこれまでの実践をふりかえることができています。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>運営推進会議を開催し始めた当初は、誰に参加してもらおうかといったことや内容に関して戸惑いも多かった。現在は利用者、家族、公民館長、民生委員、見守りサポーター(住民)のほか、保健介護センター、地方振興局、警察、他事業所の関係者も招いており、参加者は多様である。内容も、事業所からの状況報告に加えて協議事項を設定し、参加者間のディスカッションにつながるよう進行が図られている。運営推進会議を、事業所と地域にとって実りのあるものにしていこうとする強い意欲が感じられる。</p>
重点項目③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>家族への連絡は随時行われており、毎日の様子を記録した日誌の送付も、家族の安心感につながるものと感じる。家族からの意見は事業所に対する感謝や好意的な意見が多く、これまでの取り組みに対する成果として捉えられる一方で、事業所では率直な意見が得られていないのではないかという思いもある。すでに実施されている家族会や家族アンケートなどで、運営に対して建設的、主体的に意見を出してもらえるような工夫が期待される。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>利用者にとっては、日々の買い物や地域行事への参加が地域との交流の場面となっている。また10年以上にわたる取り組みと、同一市内に複数事業を展開する法人の取り組みを背景として、多くの協力依頼があるなど、地域からの信頼は厚い。運営推進会議では地域全体の話題も検討対象としており、多様な参加者構成と併せて、地域組織化の起点ともなり得る取組みとなっている。</p>

## 2. 評価結果(詳細)

確定日 平成20年4月16日

(  部分は重点項目です )

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
<b>1. 理念と共有</b>					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	全職員で毎年度作成する事業所独自の理念は「自分がして欲しいケアとは」をテーマに、全職員で話し合い、確認し合い、今年度は「笑顔あふれる毎日の中で支えあう日々」と作り上げ、楽しく、ゆっくり、いっしょに、をモットーにその実現に取り組んでいる。	○	今後も年度ごとにスタッフの意見集約をし、必要に応じて理念を見直していく予定としている。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念を玄関に掲示し、誰にでもみれるようにしている。職員は利用者の笑顔をみれることを喜びとしながら、利用者に関わる際にゆっくりと話を聞くこと、決めつけた捉え方をしないことなどを心がけている。また「ひまわり通信」による利用者、地域に対する理念の啓発にも取り組んでいる。		
<b>2. 地域との支えあい</b>					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	介護教室や講演の依頼などは多く、地域から非常に頼りにされている。小正月行事、敬老会、盆踊り大会など、多彩な行事を通じて、地元の人々との交流の機会を設けている。中学校の総合学習の一環としての交流にも取り組んでいる。	○	母体となる法人では、演劇を通じて認知症の理解を広める「呆け一座」の活動を長年行っており、ユニークで効果的な取り組みとなっている。地域住民と認知症への取り組みを共有していくという点からも、一座が地域からより一層親しまれる様、活動の継続が期待される。
<b>3. 理念を実践するための制度の理解と活用</b>					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	各職員で評価項目をそれぞれ分担し、全職員が自己評価に取り組むようにしている。各職員から集約した結果は、定期的で開催する「ひまわりミーティング」において検討・共有されている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議を始めた当初は参加者も少なく、内容も事業所からの報告程度であった。その後、回を重ねる中で参加者から「自分が管理者だったら」といった建設的な意見が出されるようになり、利用者や家族の参加とあわせて、多様な地域の代表者の参加も得られるようになってきた。直近の会議では「介護職のイメージ」「地域の防犯体制」がテーマとなっている。	○	会議においては、単に各参加者からの報告のみに終わらず、参加者間の意見交換が生じるよう進行が図られている。また、その内容は事業所に関連することのみでなく、地域全体の課題として討論され、地域協働の一場面となっていると感じられる。今後も広い視野での取り組みに期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	地域包括支援センター主催の連絡会において、様々な情報を提供してもらっている。また各種行事の際にも担当者に参加してもらえるよう声を掛けている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	健康面で必要がある場合には随時電話で連絡している。また料金の支払い等で家族が訪れる際に様々な報告をしている。利用者の様子を日誌にして家族に送っており、日々の印象的な場面が伝わるものとなっている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	行事にともなって家族会で来てもらった際に意見をいただいたり、家族アンケートをお願いしたりして意見を得るようにしている。明確な要望や率直な意見などは少なく、今後もっと得られるよう工夫していきたいとしている。	○	行事など楽しい雰囲気の中では、感謝の意見は多く得られており、家族も集まっている。家族間のコミュニケーションを促進するなかで、その場面の意見に着目したり、ポジティブな捉え方の中で「サービスを良くするための材料」を考えてもらうアンケートをお願いすることなども考えられる。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人として新規事業の立ち上げもあることから職員の異動もあったが、利用者には大きな影響はないよう配慮されている。他の事業所に移った職員もグループホームに来る機会は多く、利用者の安心につながっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月2回の「ひまわりミーティング」で事業所としての内部研修を行っているほか、法人が開催する研修にも参加している。スーパービジョンやコーチングの外部研修にも参加し、日常場面での利用者との会話や職員間のコミュニケーションに活かしている。職員間のコミュニケーションは、個々の職員が孤独感を募らせることがないように重要視されている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム協会に加入し、定期的に情報交換をしている。また他のグループホームとの交換研修も実施しており、他のグループホームと3日間の交換研修を実施している。他事業所の場面から、自分達とは異なる取り組みや共通の悩み等を知ること、職員の意識向上やストレス軽減に繋げている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居に際しては「馴染み」や「家族状況」を重視しており、同じ建物内で実施されているデイサービスやショートステイの利用者が入居することも少なくない。事前に何人かの職員で自宅を訪問することで、職員と顔見知りになってもらえるよう配慮しており、複数の視点による、多面的な利用者理解にもつながっている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	共に過ごす関係として、利用者と一緒に職員も「楽しむ」ことを心がけている。また利用者の話をよく聞くのと同時に、職員も自分の話をし、利用者から気にかけてもらっている。20代の職員も多く、利用者にとっては心配されるだけではなく、心配することもできる「対等」な関係性への配慮は、利用者の喜びにつながるものと感じられる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式に沿って利用者の思いや意向を把握している。本人や家族からの話以外にも、グループホームでの日常から職員が気づいたり、新たに知ったことをアセスメントに加え、職員がペアを組んで検討するようにしている。検討された結果は職員全体に共有され、計画に反映される。	○	利用者の思いに関して職員が二人で話し合うという方法は、一人の職員が感じ取ったことを、もう一人が客観視しながら利用者理解を深めることができるほか、職員が一人で思い悩まない、職員間の連携といった点でも有効性があると考えられる。今後も継続が期待される。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	センター方式のアセスメントをもとに、「私が輝く暮らしのために」というタイトルで介護計画が作成されている。「私らしいあり方」「私の安心・快」「力の発揮」「安全・健やかさ」の4つの視点からまとめられており、サービス提供における利用者本位の姿勢が明確なものとなっている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	利用者に関して新しく把握できたこと等はアセスメントに追記し、それをもとに3か月を目途として定期的に介護計画を見直すようにしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>3. 多機能性を活かした柔軟な支援</b>					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	ショートステイと共用型デイサービスを実施しており、自宅生活を継続しての認知症ケアにも対応している。家庭的な環境でのショートステイやデイサービスは利用者側にも好評である。デイサービス利用者が帰る時など、グループホーム利用者には心さみしい場面もあるとのことだが、馴染みの関係も広がり、共用空間の雰囲気も活気が増している。		
<b>4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働</b>					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の受診は原則的に家族にお願いしているが、家族が時間をとれないときは職員が対応している。多くの利用者が、協力医療機関をかかりつけ医としているため、連携はスムーズである。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	「重度化及び看取りに関する指針」を定めて、家族に説明と意向の聞き取りを行っている。医療機関と連携しながらIVHの利用者に対応した事例もある。協力医療機関との関係性も良好で、今後も本人や家族の意向に沿いながら対応していきたいとしている。		
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
<b>1. その人らしい暮らしの支援</b>					
<b>(1)一人ひとりの尊重</b>					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者と職員の関係が深まるなかで、親しさから丁寧さを欠いたコミュニケーションにならないよう注意している。また馴れ合いの関係や、過度に親しくなりすぎることと不適切なものと考え、コミュニケーションでは利用者を大切に思う気持ちと同時に適度な距離感にも配慮している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者がどのように過ごしたいかを把握することに難しさもあるが、本人や家族からこれまでの生活歴を教えてもらうようにしている。本人にとって触れられたくない話題もあり、会話時に配慮している。出身地を話題にした会話において、利用者の個性が見えてくることが多く、生活歴とあわせて「その人らしさ」を把握する材料としている。	○	日々の状況や利用者の状態を見ながら希望に沿うようにしているが、長期間入居している利用者には身体動作が困難になってきている場合も多い。活動性の高い場面ではデイサービス利用者が中心となり、職員はグループホーム利用者への対応を課題と感じている。重度化が進む中で困難も多いが、利用者個々の「その人らしさ」に沿った支援を見出すことが期待される。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援</b>					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者から事前に食事の要望がでることは少ないが、買い物に出た際に店で食材を選んでもらうことは多い。特に魚など旬のものがあるときには、利用者も喜んで選んでいる。また準備や後片付けも利用者が手伝っており、当日も利用者が慣れた手つきで洗い物をしている場面が見受けられた。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	気持ちよく入浴してもらえるよう心がけており、歌をうたいながら入っている利用者もいる。はずかしがって入りたがらない利用者もいるが、「新しい服をもらったから着てみましょう」といった受け止めやすい誘い方をきっかけとしながら入ってもらっている。また入浴場面は利用者が安心して一人になれる場面としても大事なものと捉えている。		
<b>(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援</b>					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	掃除や朝刊配り、カレンダーの日めくり、洗たくなど、それぞれの作業を担当する利用者がある。時に利用者間で得意なことが重なり、遠慮する利用者もあるということだが、日々の関わりの中で他にも得意なことや楽しみごとが見いだせるよう意識している。	○	訪問日当日は、同一敷地内にある特別養護老人ホームでお茶会が開催され、グループホーム利用者も参加して茶道を楽しんでいた。また利用者による大正琴の演奏も行われ、日常生活では得難い華やかな場面となっていた。今後も様々な場面を活用して、利用者の楽しみや気晴らしにつながる支援を継続してほしい。
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	日常的な外出としては、食材の買い物に出たり、法人敷地内を散歩したりしている。デイサービスの送迎に、ドライブがてら一緒に乗っていく利用者もある。遠方への外出は容易にできないが、今度の春は北上展勝地に行きたいという要望があり、検討中である。		
<b>(4) 安心と安全を支える支援</b>					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は玄関は施錠していない。外に出ようとする利用者もいるが、ドアに鈴をつけて出入りがわかるようにし、職員が見守りで対応するようにしている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	防災訓練は昼と夜間の両方実施しており、避難方法も出火場所別に考えられている。また災害発生時に地域住民からの協力も得ていきたいとのことで、公民館長に相談をし、方法を検討している。	○	事業所では避難後の見守り等を含めた対応も、今後詳細に検討していきたいとしている。地域からの協力は、運営推進会議で検討を重ねながら、地域の実情にあった方法を具体化していくことが期待される。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養面では栄養士が献立に目を通しており、水分確保は個々の利用者について職員が把握し、お茶などを勧めるようにしている。食事動作や飲み込みが困難な利用者もいるが、刻み食など食事形態に配慮し、必要な部分は職員が手伝うようにしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用型デイサービスを始めるに際し、小上がりとして使っていたスペースをフロアとし、イスとテーブルを設置している。利用者や職員をあわせると、共用空間にいる人の数は多く、にぎやかな印象がある。イス等が増えたことから、利用者が移動する場面での安全面の配慮は、今後検討していきたいとしている。	○	事故防止の観点から、備品設置や対応の継続的検討が期待される。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	部屋には各利用者が思い思いの物を持ち込んで生活している。また部屋の前には利用者の若いころからの写真が数多く飾っており、利用者や家族、職員にとって本人の「その人らしさ」が感じられる配慮となっている。		